

三島由紀夫

新潮社版



日本文学全集、48

三島由紀夫

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／三晃印刷株式会社 製本所／大日本製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

愛の渴き

五

真夏の死

一五

潮騒

一九

金閣寺

二九

注 年 解
解 譜 説

山本健吉

五七

四七

四一

三島由紀夫

愛の渴き

第一章

悦子はその日、阪急百貨店で半毛の靴下を二足買った。紺のを一足。茶いろを一足。質素な無地の靴下である。

大阪へ出て来ても、阪急終点の百貨店で買物をすませて、そこから踵を返して、また電車に乗ってかえるだけである。映画も見ない。食事はおろか、お茶を喫むでもない。街の雑沓ほど悦子のきらいなものはないのである。

もし行こうとおもえば、梅田駅の階段を地下へ降りて、地下鉄で心齋橋や道頓堀へ出るのは造作もなかった。又もし一步百貨店を出て交叉点を横切れば、そこ

はすでに大都会の波打際であり、股賑をきわめた潮は押し迫り、路傍には靴磨きの少年たちが、磨かせてよオ磨かせてよオと連呼していた。

大阪の町というものを、東京に生れて育つて知らない悦子は、いわれない恐怖心をこの都会に——紳商の、ルンペンの、工場主の、株式仲買人の、街娼の、阿片密輸業者の、勤め人の、破落戸の、銀行家の、地方官の、市会議員の、義太夫語りの、妾の、しまりやの女房の、新聞記者の、寄席芸人の、女給の、靴磨きのこの都会に——抱いていたが、その実悦子が怖がつているのは都会ではなくて、ただ単に生活そのものではない。なかつたであろうか？ 生活というこの無辺際な、雑多な漂流物にみちた、気まぐれな、暴力的な、そのくせいも澄明な紺青をたたえた海。

悦子は更紗の買物袋を幅広にあけた。買った靴下を袋の底へ深く蔵った。そのとき稲妻が、開け放たれた窓にはためいた。つづいて売場の硝子棚がかすかにわななくほどの激めしい雷鳴があった。

風があわただしく入ってきて、「特売品」と書いた紙を垂れた小さな立札を倒した。店員たちが窓を閉めに

走った。室内はずいぶん暗い。それは昼日中から燈ともっている売場の電燈が、急に輝やきを増したように思われるのでわかるのである。しかし雨はまだ来そうにない。悦子は買物袋を腕うでにおした。大まかに彎曲わんきよくした竹が、手首から腕をこすってずり落ちるにまかせたまま、彼女は両の掌てのひらを頬にあてた。頬は著いしく熱い。よくこういうことがある。何の理由もなく、もちろん何の病因もあるわけではなく、出しぬけに、火を放つけられたように頬が燃えるのである。もともとは繊弱かよわな彼女の掌は、熱い両頬にざらざらと触った。これが一そう悦子の頬を燃え立たせた。

今なら何事もできそうな気がする。あの交叉点をわたって、まっすぐに、跳込台の上を歩くように歩いて、あの街の只中へとびこむことも出来そうな気がする。こう考えると、悦子の視線は売場のあいだをすぎた雑然とした物に動じない人の群へ注がれながら、忽たちちにして快速力の夢想に耽ひたった。この楽天的な女は、不幸というものを空想する天分に欠けていた。彼

女の臆病はすべてそこから来るのだ。

……何が与えた勇氣であろう。雷鳴だろるか。今しがた買い求めた二足の靴下であろうか。悦子は人をわけて階段へいそいだ。階段は雑沓ざつさくしている。二階へ下りた。そして阪急の切符売場にかかい一階の広間へ下りた。

彼女は戸外を見た。この一二分のあいだに驟雨しゅううが沛然げんと落ちていた。ずっと前から降りつづけていたように、舗道はすでに濡れそぼって、したたかな雨脚あまあしをばねかえしていた。

悦子は出口へ近づいた。冷静を取戻し、安心しきつて、軽い目まいのするような疲労をおぼえて近づいた。彼女は傘かさをもたない。外へ出ることはもうできない。……そうではない。もうその必要がなくなつたのである。

出口のかたわらに立って、彼女は雨が俄にわかにかき消してゆく市内電車や道路標識や車道のむこうの店の連なりを見ようとした。雨のはねかえりが、しかしそこまで届いて彼女の裾すそを濡らした。出口は騒然さうぜんとしていた。鞆かばんを頭にのせて走って来る男がある。洋装の女は

ネッカチーフで髪を覆ってかけて来る。まるで悦子のところへ、悦子のために馳せ集まって来るようである。彼女一人が濡れていない。そのまわりはただ濡れ鼠になった勤め人風の男女で一杯になった。怨み言をいい、冗談を言いながら、彼らはまた、今自分たちがその中を駆けて来た雨のほうへ、多少の優越感を以て向き直り、しばらく無言の顔がいつせいに豪雨の空へ向けられる。悦子もこれらの濡れている顔に交って雨空を仰いだ。雨は途方もない高いところから、まっしぐらに、これらの顔をめがけて、秩序正しく落ちかかってくるように思われる。雷鳴は遠のいた。豪雨の響だけが耳をしびれさせ、心をしびれさせる。時たまこれをつんざいてすぎる自動車の警笛も、駅のラウドスピーカーの割れた叫喚も、この響には敵わない。

悦子は雨宿りの群を離れて、切符売場の長々とうねった無言の行列のあとについた。

阪急宝塚線の岡町駅は、梅田から三、四十分の距離である。急行はとまらない。戦災を蒙って大阪から移った人たちを数多く迎えた上に、町外れに府営住宅が

沢山建てられたので、豊中市の人口は戦前に倍した。悦子の住まっている米殿村も豊中市内であり、大阪府内である。それは厳密な意味での田舎ではなかった。

とはいうものの、少し気の利いた買物を、しかも安く上げようと思えば、大阪まで一時間の余を費して出向かねばならぬ。秋の彼岸の中日の前の日に当るこの日の買物は、良人の良輔の仏前に、彼の好物であったため供えようと考えた朱欒である。朱欒は生憎百貨店の果物売場に品切れであった。外へ出てまで買う気のないなかつた彼女が、良心の咎めに責められてか、それともほかの暗黙の衝動にかられてか、街中へ出てゆこうとした矢先、雨に遮られた。それだけである。それ以外の何事もあろう筈がない。

悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛けた。窗外はとめどもない雨である。前に立っている乗客がひろげている夕刊新聞の印刷インクの匂いが彼女を物思ひからよびさました。うしろぐらい人のような動作で、彼女は自分のまわりを見まわした。何事もない。車掌の吹きならす呼笛の戦慄、暗い重い鎖がひしめき合うのに似た発車の震動、電車は単調なこうした挙

動をくりかえして、駅から駅へ、大儀そうに進行した。

雨が霽れた。悦子は首をめぐらして、雲間から放たれる数条の光りをじっと見成った。光りは大阪郊外の住宅街の群落の上に、さしのべられた白い無力な手のように落ちていた。

悦子は妊婦のような歩き方をする。誇張したけだるさの感じられる歩き方をする。彼女自身はこれを意識していなかったし、注意して矯める人もなかった。で、その歩き方は、悪戯小僧が友だちの衿首にそつとぶらさげる紙のように、彼女の強いられた目じるしになつた。

岡町の駅前から八幡宮の鳥居の前をとおつて、小都市のこまごました繁華街をぬけて、ようやく家並まばらなあたりへ来ると、この緩慢な足取のおかげで、暮色がすでに悦子を包んだ。

府営住宅の家群は灯をともしていた。夥しい数の、同じ形の、同じ小ささの、同じ生活の、同じ貧しさの、殺風景なこの部落は、そこを通る道が近道である

にもかかわらず、いつも悦子によって避けられた。あからさまに視かれるそれらの室内、安物の茶筥笥、卓袱台、ラジオ、めりんすの座蒲団、時には隅々まで目に映る貧しい食事、その夥しい湯気、どれ一つとして彼女を怒らせないものはない。およそ幸福に対する想像力しか発達していない彼女の心は、それらに貧しさを見ず、幸福だけを瞥見した。

道は暗み、虫が鳴きはじめ、水溜りがそここに瀧死の夕あかりを映して横たわっていた。左右は湿気をふくんだ微風にゆすられている稲田である。暗い澎湃としたものを包んでいる田、そのうなだれた稲穂は、昼間の稔りの輝やかしさにも似ず、喪心した植物の数かぎりない集まりのように見えた。

田舎に特有の退屈な無意味な迂路をめぐつて、悦子は小川のほとりの小径へ出た。このあたりはずでに米殿村の領域である。小川と小径の間に竹藪がつづいている。この地方から長岡へかけては孟宗竹の産地として名が高いのだ。竹藪の断れ目が、小川にかけられた木橋をわたる小径の所在を示す。悦子は木橋をわたり、元の小作人の家の前をすぎ、楓やさまざまな果樹

のあいだを、茶樹ちやのきの垣根に囲まれて迂回して上つてゆく石段を登りきり、一見したところ別荘風な、その実主人の抜け目のない節儉精神のおかげで、目立たぬところには甚だ雅趣みやうを欠いた安材木の使われている杉本家の内玄関の引戸をあけた。奥の部屋で義理の妹である浅子の子供たちの笑い声がする。

また子供たちが笑っている、何だつてあんなに笑うのだらう、あんな傍若無人ぼうじやくじんな笑いを許してはおけない、……悦子は何の決断もなしにそんなことを考える。買物袋を敷台に置いた。

杉本弥吉やまきちが米殿村に一万坪の地所を買ったのは昭和九年である。関西商船を引退する五年前のことである。

弥吉は東京近郊の小作農の息子から身を起し、苦学力行して大学卒業後、当時堂島に在った関西商船大阪本社に入社し、東京から妻を迎え、生涯の大半を大阪で送りながら、三人の息子の教育は東京で享けさせ

た。昭和九年、専務取締役、昭和十三年、社長になり、翌年勇退した。

たまたま旧友が死んでその墓参に行つた杉本夫妻は、服部靈園と名附けられる新らしい市営の墓地をめぐる土地の起伏のやさしさに魅せられ、人にたずねて米殿村の名をはじめ知つた。竹藪や栗林に覆われた斜面を含む果樹園にも恰好かっこうな地所を物色し、昭和十年にここに簡素な別荘を建てた。同時に果樹の栽培を園芸家に委嘱した。

が、一向それは息子や妻が期待したような別荘らしい有閑生活の根拠地とはならず、家族を従えて週末ごとに大阪から自動車で来て、日光に親しみ畑いじりをたのしむための足がかりとなつたにすぎなかつた。無気力なディレクターの長男はこうした健全な父親の趣味にせい一杯の反対を唱えたし、しんそこから軽蔑けいべつも感じていたが、結局いつも父親に引きずられるたちの謙輔けんすけは、不承不承弟たちと一緒に鋤くわを動かした。

大阪の実業家のうち、その持ち前の吝嗇けんせきに、上方風の生活力と表裏一体をなすところの陽気な厭世えんせい哲学の裏附があるものは、名高い海浜や温泉地に別荘をもと

めずに、土地も安く附合も金のかからない山間僻地に家を建てて、畑いじりをたのしもうとする人が少なくないのである。

杉本弥吉は引退してのち生活の本拠を米殿へ移した。米殿の語源はおそらく米田である。太古は海に覆われていたらしいこの地方の地味ははなはだ豊かで、一万坪の土地はさまざまな果実や野菜を産した。小作人の一家と三人の園丁が、この素人園芸家をたすけて働いたので、数年のちには杉本家の桃は市場でとりわけて珍重されるまでになった。

杉本弥吉は戦争を白眼視して暮したが、それは一風かわった白眼視の仕方であって、都会の奴等には先見の明がなかったからまずい配給物で我慢したり高い闇米を買わねばならないので、儂には先見の明があったからこうして悠々と自給自足の生活ができるのだというのであった。こんな調子ですべてを先見の明の功德に帰すると、よんどころなく引退した会社のことまでが、先見の明でやめたような気がして来て、引退した事業家が嘗めねばならぬあの苦痛と倦怠、ほとんど虜囚が嘗めるにひとしい苦痛と倦怠をも、どこかへ置き

忘れた面持だった。別に怨みもない人の悪口を面白半分に言うようにして、彼は軍部を悪しざまに言った。その悪口は、老いた妻の急性肺炎のために軍医学の発明にかかるといふ新薬を大阪軍司令部の友人からとりよせたのが、一向効目をあらわさないで彼女を殺してしまったことはいよいよ募った。

彼は手ずから草を刈り、手ずから耕した。百姓の血がよみがえって、田園趣味は一種の情熱になった。妻も見えていず、社会も見えていない今となっては、手漬をかむことさえも敢て辞さなかった。金鎖や律儀なチヨッキやサスペンダアにいじめつけられた老いた肉体の奥底から、百姓風の骨格が浮き出て来、手入れのよすぎた顔の下から、百姓の顔が丸出しになった。これを見れば、輩下をあれほど怖れさせた怒った眉や炯々たる眼光も、実は年老いた農夫の顔の類型の一つだとわかるのであった。

いわば弥吉は、生れてはじめて土地を持ったのである。これまで彼は十分宅地の持主ではありえなし、この農園も今までの彼の目には宅地の一種としか映らなかったのが、今や一つの「土地」として見えたのだ。

である。土地という形でしか所有の概念を理解しない本能がよみがえって来て、彼の生涯の業績を、はじめに確実な形で手にふれさせ心にふれさせるように思われた。成り上り者特有の心の動きで、父を蔑み祖父を呪っていた感情の源は、彼等が一坪の土地ももたなかったという事に尽きるように今では思われた。弥吉は復讐に似た愛情から、郷里の菩提寺に馬鹿でかい先祖代々の墓を建てた。はからずも先ず、良輔がここへ入った。こんなことならお隣りの服部霊園に建てておけばよかつたのだ。

まれに下阪の都度訪ねて来る息子たちは、こうした父親の変貌を理解しなかつた。長男の謙輔、次男の良輔、三男の祐輔、おのおのの心にある父の映像は、多少のちがひこそあれ、死んだ母親の手で育くまれた映像であつた。東京の中流出の通弊を身につけた彼女は、上流めかした実業家の仮装をしか良人に許さなかつた。彼女は死ぬまで良人が手紙をかむことを禁じ、人前で鼻くそをほじくることを禁じ、舌鼓を打ってスープを啜ることを禁じ、火鉢の灰に痰を吐くことを禁じた。これらはむしろ社会の寛容に委ねられれば、豪傑肌の

愛称のよりどころにもなりうる悪癖の数々である。

息子から見た弥吉の変貌は、何かいたましい、愚かな、つぎはぎだらけの変貌であつた。意気壯んな様子は関西商船の専務時代が又かえって来たかのようであつたが、このたびはあんな事務的な柔軟さは失われ、唯我独尊の甚だしきものだつた。それはいちばん、野菜泥棒を追いかける百姓の怒声に似ているのであつた。

畳二十畳敷ほどの応接間に弥吉の青銅の胸像が飾つてある。関西画壇の重鎮の筆に成る油絵の肖像画が懸つている。この胸像も肖像画も、大日本××株式会社五十年史と謂つた浩瀚な頒布本の巻頭に並んでいる歴代社長の写真にあるような、一種の様式にもとづいて描かれていた。

息子たちがつぎはぎだらけと感じたのは、こうした胸像のポーズに見るような徒らな意地っ張り、対社会的なポーズの気取つた誇張が、この田舎老爺の内にもなお根を張っていたからで、田舎の有力者風な泥くさい尊大さで吐かれる軍部の悪口は、まじめな村人たちからは憂国の至情ととられ、一その尊敬を買うので

あった。

こんな弥吉を鼻持ちならないものに考えていた長男の謙輔が、却って誰よりも早く父親のもとへ身を寄せせる成行になつたのは皮肉である。彼は無為徒食に暮して、持病の喘息から応召も免かれていたのが、徴用だけは免かれそうもないとわかつて、あわてて父の口ききで米殿村の郵便局へ先手を打って徴用してもらつたのであった。細君同伴で引越してきたからには、何らかのいざごきも起るべき筈だったが、謙輔は傲慢な父親の専制をひょうたんなままに受け流していた。こういう点にかけては彼のシニツクな天分は、十全に發揮された。

戦争がはげしくなると、はじめ三人いた園丁はのこらず出征して、その一人の広島県の青年の生家が、小学校を出たばかりの弟を代りに寄越した。三郎といふこの子供は、母親ゆずりの天理教信者で、四月と十月の大祭には、天理の信者合宿で母親と落ち合つて、背中に白く天理教と染め抜いた法被を着せられて、「御本殿」へ詣でるのであった。

……悦子は敷台に買物袋を置いて、その反響をためすように室内の夕闇を見透かした。間断なく子供の笑い声がひびいている。笑い声と思われたのは、よくきくと泣声である。それが森閑とした室内の闇をゆすつている。炊事をしている浅子が、放つたらかしにしたのであろう。シベリヤからまだ還らない祐輔の妻である彼女が、二人の子供を連れてここへ身を寄せたのは昭和二十三年の春だったから、それは悦子が良人を失くして弥吉の招きでここへやって来た丁度一年前のことである。

悦子は六畳の自分の部屋へ行こうとして、ふと見ると、欄間に灯がともっている。消しわすれたおぼえない。

障子をあける。机にむかつて何かに読み耽つていた弥吉は、おびえたように嫁のほうをふりむいた。腕のあいだからちらと覗かれた赤い背革を見れば、彼が読んでいたのは悦子の日記帳だとすぐにわかった。

「ただいま」

悦子は明るく快活な声でこう言った。目前の不快な出来事にもかかわらず、事実彼女の顔は、ひとりであるときとは別人のようであり、動作もまた娘のよういきびきびしていた。良人を失くしたこの女は、いわゆる「人間が出来ていた」のである。

「おかえり。遅かったね」——『早かったね』と正直に言いそびれて、弥吉はそう言った。

「すっかり腹が減ってしまった。今、手もちぶさたに、お前の本を借りて読んでいたんだよ」

彼がさし出してみせる本は、いつのまにか日記帳とすりかえられた小説本で、悦子が謙輔から借りた翻訳小説であった。

「農にはむつかしくて、何のことだかわかりはせん」
 農耕用の古いニッカボッカを穿き、軍隊式ワイシャツの上に古い背広のチョッキを羽織っている弥吉の身装は、この数年来変りはなかったが、その卑屈なほどの謙虚さは、戦争中の彼、悦子が知らない彼と比べると、甚だしい変化である。のみならず肉体の衰えもあらわれて、眼差は力を失い、傲岸に結ばれていた唇は

やや締りをなくしていた。そして話すにつれて、馬のように白い唾の泡が、口の両はじに溜った。

「朱薬ごさいませんでしたのよ。ずいぶん探しましたのに、ごさいませんでしたわ」

「そりゃ、残念だった」

悦子は畳に坐って帯に手をさし入れた。歩行のほりで、帯の内側は室のように体温が籠っている。彼女は自分の胸が汗ばんでいるのを感じた。寝汗のような密度の濃い冷めはてた汗。まわりの空気を匂わすほどに漂い出ながら、それ自身は冷めはてた汗である。

体じゅうを不快に緊縛するものがあるように感じられる。彼女は坐っている体を不意に崩した。彼女のこういう瞬間の姿態は、よく知らぬ人には誤解の種になりかねなかった。弥吉も何度かそれを媚態ととりちがえた。しかしそれが彼女のひどく疲れているときに無意識にする仕草とわかつて、そんな時に手出しをすることは差控えた。

彼女は体を崩して足袋を脱いだ。足袋にははねが上っている。足袋の裏は薄墨いろに汚れていた。弥吉は言葉の継穂を探しあぐねて、こんなことを言った。

「大そう汚れたね」

「ええ、道が悪うございましたから」

「ひどい雨だった。大阪のほうも降ったかね」

「ええ、阪急で買物をしておりましたときに」

悦子は又しても思いうかべた。耳も聾せんばかりの豪雨の響と、世界中が雨になつたようなあの密閉された雨空と。

彼女は黙っている。彼女の部屋はここだけしかない。弥吉の目の前で、頓着なく着物を着かえた。電力が乏しいので、部屋の電燈は甚だしく暗い。黙っている弥吉と黙って動いている悦子とのあいだに、解かれる帯のあげる絹の軋り音だけが生物の叫びのようにきかれた。

弥吉は永く沈黙に耐えていることができない。彼は悦子の無言の非難を感じていた。食事の催促を言い置いて、廊下一つへだてた自分の八畳へかえって行った。

悦子は普段着の名古屋帯を結びながら、机のそばへ行つて、片手はうしろへ廻して帯を押えながら、片手ものぐさらしく日記帳の頁をめくつた。するとその

唇にすこし意地のわるそうな微笑がうかんできた。

『お舅さまはこれが私の贖物の日記だと御存知ない。』

これが贖物の日記であることを誰が知ろう。こうまで人間が自分の心を巧みに偽れるものだと誰が想像することができよう』

丁度きのうの頁がひらかれた。暗い紙面へ悦子は顔をうつむけて読んだ。

九月二十一日（水曜）

今日一日は何事もなくおわつた。もう残暑の息苦しさもなく、庭は虫の音でいっぱいである。朝、配給のお味噌をとり村の配給所へゆく。配給所の子供が肺炎にかかつて、やつとペニシリンが間に合つて、助かりそうだという。ひとごとながら、胸をなでおろす。

田舎ぐらしには単純な心が必要だ。どうやら私もその修業を積んで一人前になつた。退屈ではない。もう退屈しない。もう決して退屈しない。農閑期のお百姓ののどかな安息の気持がこのごろの私にはわかる。お舅さまのおおらかな愛に包まれて、私はなんだか十五六の昔に還つたような気持だ。